

日本むかしばなし 8

たろうとじろう

民話の研究会 編 小川 陽 絵



民話の研究会・編

たろうとじろう

ポプラ社 昭和54 (1979)

139p 22cm

N.D.C. 388

日本むかしばなし ⑧

たろうとじろう 民話の研究会・編／小川 陽・絵

発行 ■ 1979年2月第1刷

定 価 ■ 760円

発行所 ■ 株式会社ポプラ社 東京都新宿区須賀町5

発行者 ■ 久保田忠夫

写 植 ■ 株式会社電算プロセス

印 刷 ■ 暁美術印刷株式会社

製 本 ■ 島田製本株式会社

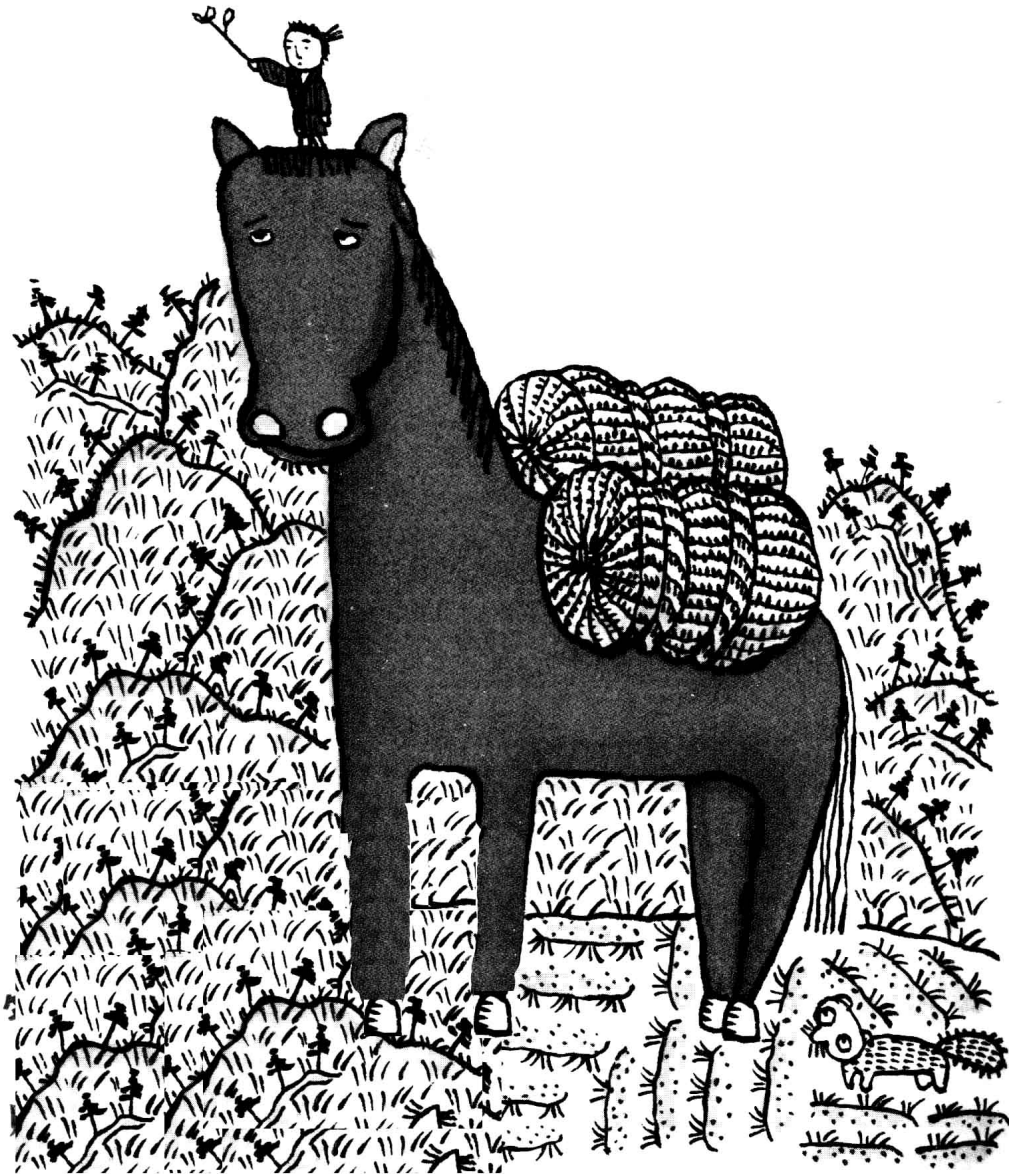
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

8093-100008-7764

日本むかしばなし 8

たろうとじろう

民話の研究会 編 小川 陽 絵



もくじ

どんぐり太郎

..... 木暮正夫

親ゆび太郎

..... 中村 博

つぶたろう

..... 桜井信夫

すねこたんぱん

..... 今村泰子

ももたろう

..... 小沢重雄

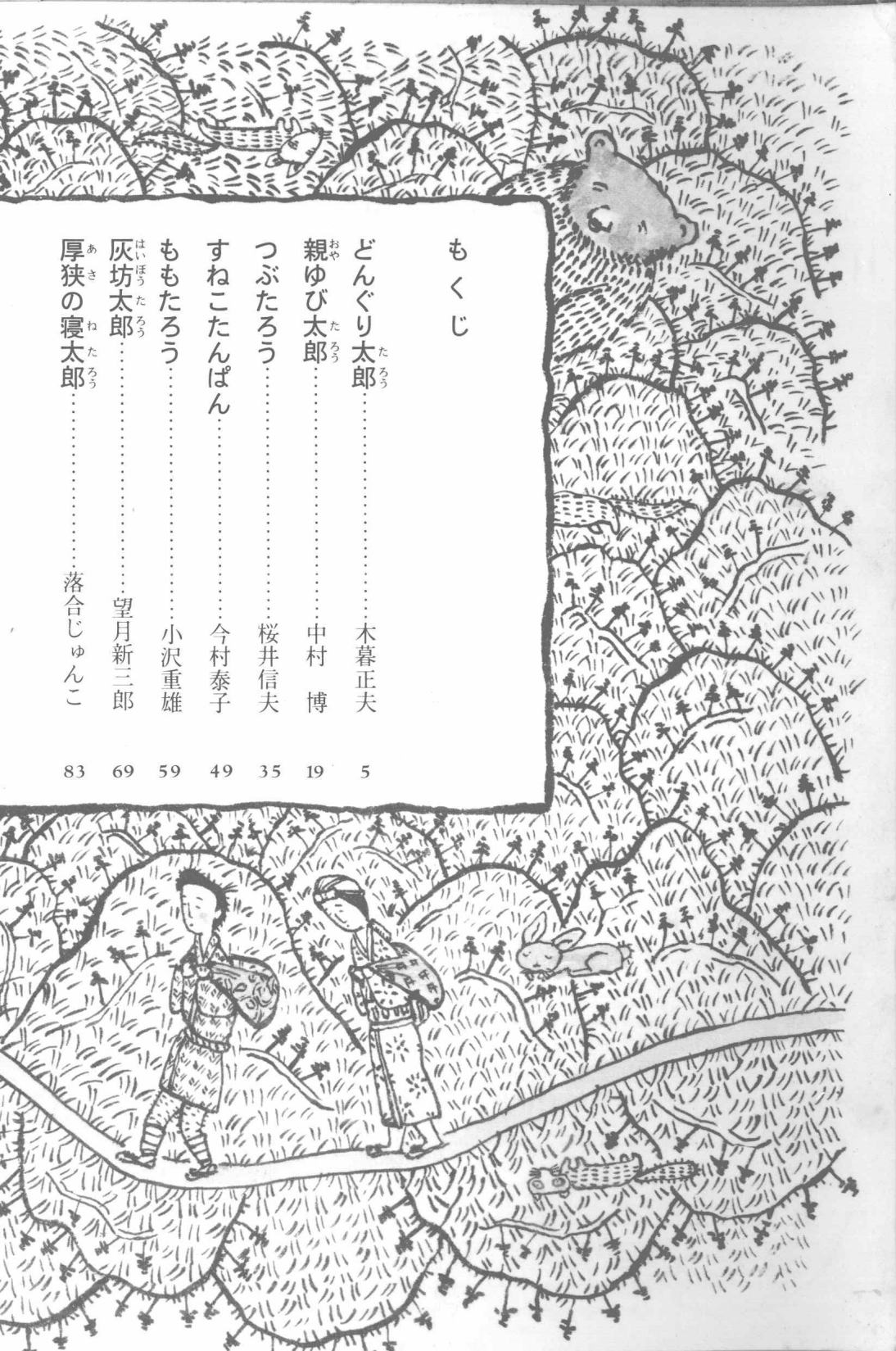
灰坊太郎

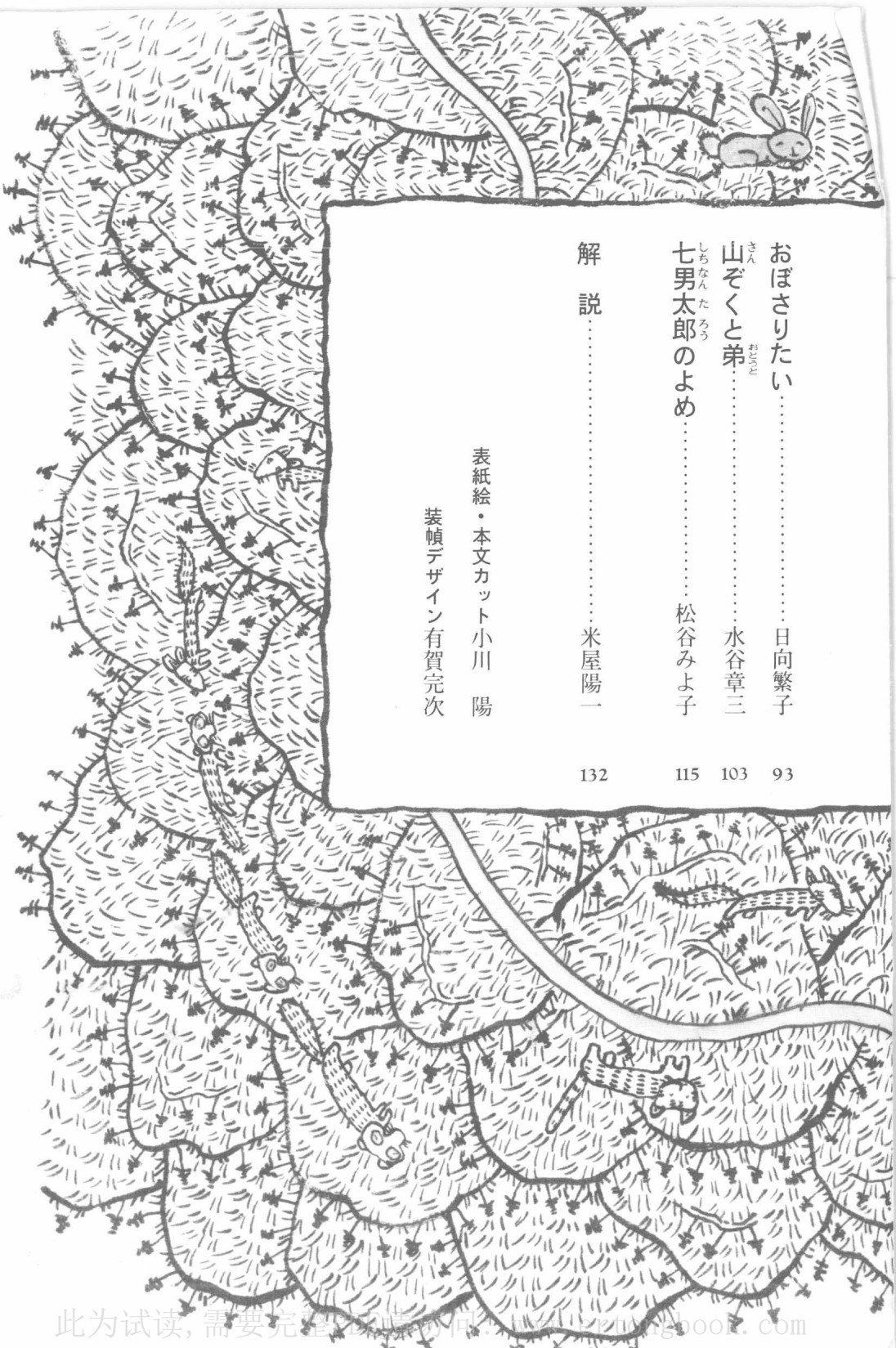
..... 望月新三郎

厚狭の寝太郎

..... 落合じゅんこ

83 69 59 49 35 19 5





おぼさりたい……………日向繁子

山ぞくと弟……………水谷章三

七男太郎のよめ……………松谷みよ子

解説……………米屋陽一

表紙絵・本文カット小川 陽

装幀デザイン有賀完次

132

115 103 93



■編集委員

水谷章三

渋谷 勲

米屋陽一

■民話の研究会

民話の研究会は、民話の好きな人びとが集まって、勉強をしている会です。

この十年近く、研究例会や民話採訪をつづけ、現在、明日の民話を考える雑誌として、「民話の手帖」(蒼海出版)を年二回発行しています。

■画家紹介

小川 陽

一九四八年、京都市に生まれる。

デザイン事務所勤務後、フリー。

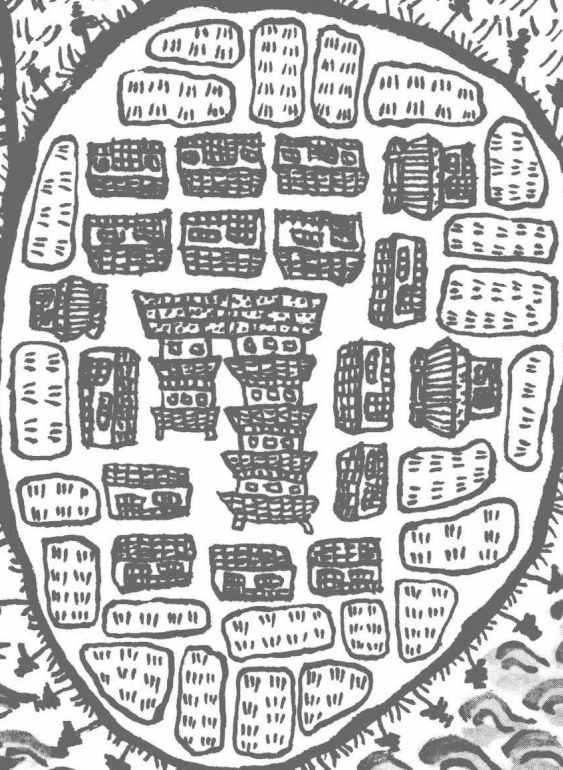
一九七六年ごろより童画を手がけ、現在に至る。

この本の執筆者は民話の研究会の会員で、その顔ぶれはさまざまです。学術、教育、演劇、文学にたずさわる人びと、そして学生もいれば主婦もいます。

どんぐり太郎

たろう

木暮正夫



むかし、あるところに、おじいとおばあがあつた。年をとつても、子どもがおらんもんで、今からでも子どもをさずけてもらおうと、村の八幡さまだ、やれ明神さまだと、ほうぼうの神さまをおがんでおねがいしておつた。

したらば、ある日のこと。山へしばかりにいったおじいが、いつものはんぶんもしばをからんうちに、

「はらがいたくてがまんがならんわ。」

と、青い顔して山からさがつてきた。

「そりやあいけん。食いあわせでもわるかつたんかのう。」

おばあが薬をせんじてのませても、おじいははらをおさえて、うんうんいつておる。

「さすつたれば、いくぶん楽になるやもしれん。」

おばあが、はらをさすつてやつたれば、へそのあたりがぼこつとふくらんで、赤うはれとる。

「じいな、じいな。こりゃあ、医者^{いしや}どんをよばって、みてもらわにや、なおるまいぞ。」

「それもそうだが、医者^{いしや}どんにきてもらうほどの銭^{ぜに}もなし、ここはがまんせねば……。」

そういつておるうちに、おじいのはらはますますいとうなつて、どうにもならん。たまりかねたおじいが、

「うーん。」

とうなつた。と、そのとき。おじいのへそのあたりで、ぱちつとなにかはじけるような音^{おと}がしたかとおもうと、ゆびのさきほどのまあるいものが、ころつところがりだした。

おばあが、それを手^てにとってみれば、

「なんとまあ、たまげたこと！」

どんぐりほどの男^{おとこ}わらしであったと。

「わらしじや、わらしじや。こんなめでたいことがあろうか。」

おじいもおばあも、ことのほかよろこんで、この子に「どんぐり太郎」つて名をつけ、だいにそだてたと。けど、太郎はいくら食わせるものを食わしても、大きくならん。十になつても、馬の耳にすっぽり入るほどの大きさにしかならん。

「これでは、いく年たつても、よめをむかえることもできん。なみの子のように、せたけさえのびたらなあ……。」

おじいもおばあもなげいた。けど、太郎にはなかなかちえがあつて、小さいなりに仕事もちよこまか手つたうようになったと。

どんぐり太郎が、十八年の年のことだった。ある日だしぬけに、

「おら、旅にでてみてえ。」

と、いうたと。おじいもおばあも、

「おまえのようならだのものに、どうして人なみの旅ができよう。」



あわててとめにかかったけど、

「おらにはかんがえもあることだから、どうか安心あんしんしてだしてくれろ。」

と、いうてきかん。おじいとおばあはしかたなく、旅たびのしたくをととのえてやった。太郎たろうは、おばあにこしらえてもらったにぎりめしのつつみをしよい、こしにはもめんばりの刀かたなをさすと、

「では、いってまいりますで。」

なにをおもったのか、ひとしばりのなわを手に、家いえのやねへのぼっていった。

「太郎たろうのやつ、なにをしとるんじや。」

旅たびにでるなら、街道かいどうへいかねばならんのに、やねにあがって空そらばかりながめておる。おじいがふしぎにおもっているとやがて、北きたのほうからとんできた一わのコウノトリが、ふわつとやねにとまって、はねをやすめた。すると太郎たろうはすばやく、持もっていたなわで、コウノトリの足あしにからだをくくりつけ

た。

「なるほど、南みなみの島しまへいく鳥とりに、つれていってもらおうというわけか。さすがは太郎たろうじゃ。」

おじいとおばあがかんしんしておるうちに、コウノトリは南みなみの空そらへ、とびたつていった。

「こんな楽らくな旅たびはないわ。」

コウノトリはみるみるうちに山やまをこえ、谷たにをこえ、広いひろ海うみにでた。海うみの上うへをしばらくまっすぐにとんでいくとやがて、森もりもあれば町まちも城しろもある島しまがみえてきた。

「この島しまはおもしろそうだ。」

島しまの上うへにさしかかった太郎たろうは、ころあいをみはからうと、むすんでいたなわを「えいっ」といって、町まちはずれの草原くさはらにすーんととびおりた。

太郎たろうが町まちへむかっててくてくいくと、

「たいへんじゃあ、たいへんじゃあ。」

荷物にもつをかついだ人ひとたちが、口ぐちくちにいいながら、町まちのほうからにげてくる
ところにであつた。どうしたことかと、太郎たろうがわけをきけば、

「となりの鬼おにが島しまの鬼おにどもが、殿とのさまのおひめさまをさらいにきて、大あば
れしとる。町まちはもうたいへんなさわぎじゃ。」

こわごわいつて、にげていった。

太郎たろうが町まちへいつてみると、鬼おにどもにふみあらされて、ひどいありさまじや。
すると、城しろのほうから、鬼おにどもがぞろぞろできた。せんとうの鬼おにのかしら
は、ひとときわ大きな赤鬼あかおにで、城しろからさらってきたおひめさまを小わきこにかか
えておつた。おひめさまはおそろしさのあまりか、氣きをうしなつておる。

「えいっ！」

太郎たろうはすばやく、鬼おにのかしらがかかえていたおひめさまの着物きもののそでにと
びこんだ。



鬼どもは浜につけてあつた船にのりこむと、かちどきをあげて、鬼が島へ
ひきあげていった。船が、岩だらけの鬼が島につくと、

「きようはいわいだ。酒倉あけろ。」

かしらのひと声で、酒だるがいく十となくならべられた。

「いくらのんでもかまわんぞ。めでたい、めでたい。」

うかれた鬼どものめやうたえの酒もりは、いつはてるともなくつづいた。
おひめさまは生きた心地もない。しくらしくらないてばかりおった。

酒もりが三日三ばんつづくと、さすがの鬼どもものみくたびれたとみえ、
あつちでグウグウ、こつちでもグウグウ、大いびきをかきはじめた。

「だらしのないやつらだ。」

と、いつていた鬼のかしらも、いつしかねむけがさしてきたのか、ゴオゴオ
といびきをかいて、正体もない。「今じゃ」と、太郎は、おひめさまの着物の
そでからとびでると、

「ひめ、ひめ……。おらが今^{いま}、おたすけもうす。」

なっているおひめさまにいうてやった。

「おまえは、だれ？」

「どんぐり太郎^{たろう}じや。」

「どうしてここへ？」

「ひめさまがさらわれてくるとちゅう、着物^{きもの}のそでにとびこんで、ひめさまといっしょにきた。まあ、みておってください。」

太郎^{たろう}はもめんのはりの刀^{かたな}をぬくと、つぎつぎと鬼^{おに}の耳^{みみ}にとびこんでいって、
「えいっ」とやって、ぷつん。「えいっ」とやっては、ぷつん。耳^{みみ}のおく
の鬼^{おに}の急所^{きゅうしょ}にはりをつきたてた。どんな鬼^{おに}でも、これにはかなわん。手下^{てした}の
鬼^{おに}どもをすっかりやつつけた太郎^{たろう}は、のこったかしらの耳^{みみ}にとびこんで、「え
いっ」、ぷつん。一ぴきのこらずせいばつしおえた。

「ひめ、ひめ。もうしんぱいはいらん。」